清の游智開と朝鮮の朝貢使節

――領選使の派遣を中心に――

崔　蘭英

Ⅰ．はじめに

清の永平府知府游智開は、一八七〇年代後半に清の李鴻章と朝鮮の李裕元の間に往来した書簡を仲介した人物として、田保橋潔氏によって言及されてから久しい。[1] 近年では、夫馬進氏によってその橋渡し役としての重要性が指摘されている。[2] しかし、その役割が具体的にどのように果たされていたのか、なお不明な点が多い。

游智開は一八五一年に三十五歳で科挙に及第し、一八六一年に初めて官途につき、一八七二年に永平知府に就任した（永平府は朝鮮からの朝貢使節団の通る道にあり、義州を出て千四百六十九里、北京まで五百十里、[3] 現在の河北省盧龍県一帯にあたる場所である）。一八八〇年に李鴻章の推薦で永定河道に昇任するまで、八年にわたりこの永平にて朝鮮の朝貢使節らと交流をし、その中で果たした大きな仕事の一つが、この李鴻章と李裕元の書簡仲介であった。

李鴻章の書簡は、朝鮮の対外政策について助言し、とりわけ対欧米開国と軍備の強化を勧めるものである。その朝鮮近代史にとっての重要性は、原田環氏の研究によりすでに明らかにされている。[4] 私信の性格を持つ書簡の一部は李裕元によって朝議に付され、公になったのである。その後一八八〇年五月に日本に派遣した第二次修信使である金弘集が帰国し、駐日清国参賛官の黄遵憲が執筆した『朝鮮策略』を持ち帰った。これを契機に朝鮮は、開国開化政策に転じ、一八八〇年十二月に外交と開化政策を管掌する統理機務衙門、八一年に日本人教官を迎えた新式軍隊である別技軍を新設した。一八八一年九月に、領選使金允植に引率された両班出身の留学生と工匠一行を「学造器機事」のために、天津の機器製造局に派遣し、新式兵器の製造技術および軍事技術の学習を図った。

この領選使の派遣について、先行研究では「近代的な政治制度や技術の習得のために日本に朝士視察団、清国に領選使を派遣したりした」[5] というように、ほぼ同時期に行われた領選使の清国への派遣と日本への視察団派遣を、朝鮮が近代的科学技術の受容・導入をはかったことで高く評価している。

一方、派遣された留学生と工匠らは予期に反して、成果をあげることなく、一年で帰国してしまったことから、領選使の派遣が「失敗」した

と否定的に見られている。[6] その原因は不適切な人選、財政支援の不足、壬午軍乱がもたらした混乱、および清の対朝鮮政策の転換などにあると指摘されている。既存の研究は留学生の学習成果と壬午軍乱になされた清軍の朝鮮駐屯などの外部要素に注目する余り、朝鮮が自ら兵器を製造できるようになる貴重な機会を逃し、清への従属度が高まったとの結論まで導いている。[7]

領選使派遣のもう一つの契機となったのは、『朝鮮策略』であると指摘されている。[8]『朝鮮策略』は、朝鮮に開化政策を助言する中で、「学生を遣わして京師同文館に赴いて西語を習い、直隷に往って淮軍にて兵を習い、上海製造局に往って造器を学び、福州船政局に往って造船を学ぶ」と朝鮮「自強」の道を具体的に示したからである。[9]

朝鮮は一八八〇年七月に、清に咨文を送り、天津にて「学造器械」を依頼したいと述べたところ、[10] 十二月に清の許可が出たのである。[11] 八一年二月には、清に派遣する使節を「領選使」と命名した。

以上の経緯と従来の研究成果を踏まえてまとめれば、宗主国の清の積極的な対朝鮮政策がプル要因となって、それに朝鮮に形成された「進歩的」な開化派の開化自強、近代化を望む願望がプッシュ要因となり、「学造器機事」のための領選使一行が派遣された、という図式になる。つまり、清が朝鮮に対して外交政策を助言し、「開化派」である一部の朝鮮の政治家がそれを受け入れる。次に、朝鮮は開化政策推進のためにさらに清の協力を求めてきて、清はまたそれに応じて協力するという、単純明快な流れである。これまで、朝鮮は明・清の二時代にわたって、中国に「朝貢」という形で定期的に使節を送っていたが、「兵器製造を学習する」ために人員を送り込んだのは初めてのことである。しかしこのような初めての自強策を実践することになったにもかかわらず、具体的に誰が、如何なる交渉を、如何にしてきたか、という点が明らかにされていない。

本稿では、既存の研究と異なる視点に立ち、「学造器械事」をめぐって、属国の朝鮮は宗主国の清との間にどのような交渉をしていたのかということについて、新たに発見された游智開の詩文集『蔵園詩鈔』を使用して検証したい。特に、これまで表舞台に出て来なかった朝貢使節に同行する訳官たちの言動に注目し、その役割を検討する。それによって、従来の研究を補完し、朝鮮の対外政策、そして清と朝鮮の宗属関係の考察に資することを目的とする。

なお、便宜上、本稿では年を陽暦にし、月、日は史料の記載通りに陰暦を使用した。

Ⅱ. 『蔵園詩鈔』

1. 刊行について

游智開の詩文を収録した『蔵園詩鈔』は管見の限り、これまで研究に使われたことがない。現段階では、北京国家図書館に二冊、ソウル大学附属図書館奎章閣に二冊の計四冊の所蔵が確認できる。後に詳しく述べるが、北京にある二冊のうち一冊は一八八三年に朝鮮で、もう一冊は一八九四年以降北京で印刷されたものであると見られる。奎章閣所蔵の二冊は同じ版で、一八八六年に印刷されたものと考えられる。

游智開（一八一六～一九〇〇年）、字は子岱，号は蔵園、または蔵園

主人、平原、天愚、廉訪。湖南省新化県の人。一八九八年までに四川按察使、廣東布政使、廣西布政使を歴任した。

游智開は文墨に優れているようであるが、清の文学史上に名を遺すほどの人物であると言いがたい。にもかかわらず、百八十四首の五言絶句と七言律詩の漢詩を収録している彼のこの詩文集は、初版から版を重ねて、少なくとも三つの版本が現存する。また、朝鮮と中国の両国で印刷された点にも注目すべきである。

一八八三年版の北京所蔵本は木活字、朝鮮本の特徴的な五針眼の線装である。縦は約二十二センチ、横が約二十九センチ、青緑色の表紙で、題簽がない。全巻一冊で六十二丁、版心に書名、匡郭、界線がある。刊記に「光緒九年仲夏　吉雲館活字印」となっている。刊行した巻首には朝鮮の訳官である卞元圭が著した序文がある。序文は、「玄圃（崑崙山にあるという仙人の住む所――筆者、以下同）を遊覧しなかったら、どうしてたくさんの財宝が分かろうか、嫏嬛（天帝の書庫）に到らなかったら、どうしてたくさんの書物の宝庫が分かろうか」から始まり、続いて中国は風雅で傑出した人物が多い中、游智開の健筆は「衡山の秀逸をはぐくみ、川の水の清みを含む」ようであると称えた。その上で卞元圭は、美しい玉のような文章を東国である朝鮮に広めるために、『蔵園詩鈔』を刊行したと述べている。さらに游が海国（朝鮮を指す）と交流し、姜行人（文馨）と詩文を唱和し、李相国（裕元）と親交を持っていることも序文で挙げている。

卞元圭は一八三七年に生まれ、没年は確認できない。訳官出身の官僚で、『高宗実録』によれば、一八八三年に器械局幇弁、一八八四年に知敦寧府事、協辦交渉通商事務になったが、その後いったん失脚した。しかし復活して一八九四年までに幾度も漢城府判尹（正二品）に任命された。本貫が草渓、字は大始という。号は吉雲、蛛舡。父も訳官で名前は秋舲、父子ともに長年朝貢使節に随行して清に何度も行っていた。刊記にある「吉雲館活字印」は号の「吉雲」からとったのであろう。游智開と交流し、その詩文を朝鮮に持ち帰って印刷した頃は「副司直」（従五品の武官職、任命時不詳）であった。

一八八六年以降の版本には、游智開の友人傅鍾麟[12]による巻尾跋が収録され、刊行に至った経緯について、次のように説明している。「春秋の時に列国の士大夫が他国に出向かう時に、詩文を唱和することは盛事として伝わってきている。外藩の使節が北京に朝貢して来る時は、清の士大夫と唱和することが多い。游智開と卞元圭も文字を通じて縁を持ち、特に親交が深かった友人であった。卞元圭が帰国する際に游の手稿を持ち帰ってから、これを見たいと言寄ってくる人が多かったため、印刷に付しておいた」としている。また、卞元圭が印刷してくれたことについて、次のように綴っている。すなわち、「昔、朝鮮の商人らが白居易の詩を買うといっても、その名を慕って数首買って行くだけだったのに、もし卞元圭に完全に敬服の心がなければ、どうしてこのようなことをしてくれたことでしょうか（昔鶏林賈人購白傳詩、不過慕其名購数詩以重帰耳。茲卞君則非実佩厥心、豈肯為是）。しかしこの部分は後の一八九四年版本では削除されている。

このような経緯で朝鮮で印刷された『蔵園詩鈔』は一八八四年に、游のもとに百冊送られてきた。北京国家図書館に所蔵されている一八八三

年の版本はこの時に送られてきたものと推測される。卞元圭は游智開の文才に心酔して、その詩文を刊行したとしているが、游智開にとっては思いもかけなかったことで、詩文の選別を行っていないものを、「唐突に遠邦に示した」ことを後悔し、すぐにその門下生である崔次文と一緒に数か月かけて、改訂を行い[13]、八三年版の中から「過亡弟墓」や「新婚曲」などの十五首を削除し、新しい作品を加えたものが一八八六年の北京刊行本である。

奎章閣にある二冊は一八八六年版本と見られるが、どのようなルートをたどって所蔵に到ったかは不明である。四針眼の線装、山吹色の表紙で、北京所蔵のものより枚数が二十一枚多く、八十三丁となっている。刊記は「光緒丙戌歳二月」と、刊行年、月のみになっている。卞元圭による序文は変更がなく、新たに先に紹介した巻尾跋が加えられている。蔵書印は両方とも「ソウル大学図書」、「京城帝国大学図書」、「朝鮮総督図書」の印が押されており、このほか一冊には「集玉斎」（景福宮に作られた国王高宗の書斎）、「帝室図書之章」があって、もう一冊には「編輯局保蔵」「卞邑鼎相」の印が押してある。実は、李裕元のもとにも『蔵園詩鈔』があったようである。しかしこれは卞元圭の印刷に付したものではない[14]。一八七六年夏に李裕元が游智開宛てに送った書信の中に、『蔵園詩鈔』について、「按（ママ）（案）頭に置いており、常に大事に拝見している」とした上で、詩文の素晴らしさを称賛していた。恐らくこれは、卞元圭と同じように游智開に贈与品としてもらったのであろう。清の文人が朝鮮の使節と交流する場合に、詩文を唱和するとともに、こういった作品集や書物の贈呈も頻繁に行われていたようである。『蔵園詩鈔』にもこのような記録が多見する。

三つ目の版本は、一八九四年以降から一九〇〇年までの印刷であると推定する。『蔵園詩鈔』にある詩文の執筆年代はほとんど書かれていなかったが、この版の冒頭の一首目「古近體一卷」という詩に、「光緒二十年甲午秋日」と記されているのが一番新しい日付である。その内容は一八八六年版と比べて、さらに増減が見られたものの、丁数は変わらず本文が八十一丁に、跋文二丁であった。

2．『蔵園詩鈔』から見る游智開と朝鮮使節とのかかわり

右に述べたように、『蔵園詩鈔』は版ごとに改訂していて、最初の一八八三年版には不明なものを除けば、朝鮮の使節あるいは朝鮮について詠ったものは計二十一首収録してある。一八八六年版は李裕元にかかわる詩四首が削除され、閔種黙に贈った三首が加えられた。また、一八九四年版には卞元圭を懐かしむ詩一首が追加されている。継続して収録されている詩文は表現の修正が若干見られるものの、大きな変更がなかった。以下、游が詩文に詠った人物について、特に断りのない限り、一八八六年版にしたがって人物別に見ていく。

①朴珪寿（一八〇七～一八七七年、字は桓卿、瓛卿、号は瓛斎、本貫は潘南）。

朴珪寿は一八七二年進賀正使として二度目の使行の時に游と出会った。三七～三八頁に游智開が朴珪寿に送った詩二首と解説がある。これによると、朴珪寿は游に、朝鮮の京にある会賢坊というところに住んで

おり、友人らとよく蘇東坡（蘇軾、北宋の文人）の誕生日を祝う会を開くと話した。それを聞いた游智開はその夜に夢で蘇東坡に会った。これに因んだ詩を作って、朴への羨望を述べた。その晩二人は、蕭寺（仏教の寺）で「飲恣大酔」と書いてある内容から、痛飲して交流したようだ。付言すれば、後述する李裕元との宴会もここ蕭寺にて行われていた。[15]

②姜海蒼と姜白石

四〇頁に「寄姜海蒼」の一首がある。一八八三年版では「蒼」の字が誤って「滄」になっていたが、一八八六年以降の版では「蒼」で統一されている。游智開は数年間にわたって姜海蒼と頻繁に書信を交していたが、最近はめっきり少なくなったとつぶやいた内容である。ここで、朝鮮の友人の中で姜海蒼がもっとも長い付き合いだったと述べたことから、姜海蒼は一八七二年に進賀使の書状官として、朴珪寿に同行して清に赴いた姜文馨（一八三一～没年不詳、字は徳輔、蘭圃、本貫は晋州）のことであると推測される。

三六頁には帰国する姜海蒼を送別する「送朝鮮使臣姜海蒼帰国」があって、帰途の労をねぎらう内容である。すぐ左に「又送姜白石」の一首があり、朝鮮使節の餞別に詩を贈ることが多かったようである。姜白石については不明であるが、りっぱな風采で「翩翩年少」となっているので、この時すでに四十歳を過ぎた姜海蒼のことではなく、随行人中の他の一人である可能性が高いと思われる。ここにも「酒酣吟旅館」とあり、酒宴にて詩文を唱和したことが語られている。どのような詩が詠まれたであろうか。この時ではないかもしれないが、四〇頁から四一頁に、「朝鮮贈答詩五首」が収録されている。五首のうち二首が「姜候が我に硯を貽り、李相は我に洗を貽る」、「姜候が我に簡を貽り、李相は我に書を貽る」から始まっているが、姜公とは姜海蒼のことで、李相は李裕元のことであろう。それぞれ自分に硯と筆洗（筆の穂先を洗う器）を贈ってくれたという。残りの三首は「何以報遠人」から始まって、つづいて遠方からの客には「呉綾、象環、美酒」を以ってこたえると書いてある。呉綾は江蘇省呉江の特産品で、高級シルクの一種、象環は象牙で作られた装飾品で、いずれも贅沢品で、朝貢使節が北京会同館会市での取引を禁止されているものである。希少価値の高い品が実際に贈られたかどうかを確かめることができないが、書簡、文房具をもらった返礼にそれらの品名が上がっていて、朝鮮使節との酒宴は盛り上がっていたのは間違いないであろう。

贈答品に関する記述は三六頁にも見られる。

③沈士民

三六頁に「寄懐朝鮮沈士民」の一首がある。沈士民についての詳細は不明だが、游智開が永平府に在任した期間を考慮して、一八七四年冬至使副使の沈履澤（一八三二～一八九二年、一八八一年紳士遊覧団のメンバーとして日本へ視察に訪れた）か、一八七七年冬至使正使の沈承澤（一八一一～没年不詳）かどちらか一人である可能性が高い。この詩には「東国の客が慇懃に上薬を贈ってくださり、常にその多情さを感じる」と詠まれた句があり、延命長寿の上薬とは、朝鮮人参や朝貢使節がよく携行していた清心丸（牛黄を主成分としている生薬）のことであろうか。

いずれにしてもこうした贈与は朝鮮使節と清の官員の間に頻繁に行われていた。

④李裕元（一八一四～一八八八年、字は京春、号は橘山、嘉梧室、林下廬、黙農）

李裕元は游智開の仲介で、李鴻章と書信をやり取りするようになったのは、「はじめに」で紹介した先行研究によって既に明らかになっている。実は、李裕元は一八七六年に清から帰国してから、道中で知り合った瀋陽将軍である崇実と、清から勅使として朝鮮に来た吉林将軍の銘鼎とも書信を交していた。そこで次回に派遣される朝貢使節に書信と一緒に贈り物も託した。瀋陽将軍への贈り物は「佳什及各珍品」としか分からないが、吉林将軍に送ったのは清心丸百個であった。二人から答礼をもらったが、その中身は不明である。[16] ただ両者との書信はいずれも二回往復したにとどまって、継続されなかったようである。

遠方の客への贈り物としては、少し変わっているかもしれないが、游智開は李裕元に橘の盆栽を贈った（三六頁、「盆橘一株贈朝鮮使臣李橘山」）。そして李裕元の号である「橘山」にちなんで、詩を三首添えている。これをもらった李裕元は感激して、返礼の書信を送った。そこには、感謝の気持ちをつづった後、「弟幸即竣事、念後可以還簇、歴拜有期」と、幸いにも用事をもう少しで済ますことができるので、戻って行った時に游智開と再会することを期待していると結んでいる。[17] つまり、李裕元は北京に赴く途中に一度游智開に会い、帰路にもう一度会った。

年齢が近いこともあるからか、二人は意気投合し、酒を飲み詩文も交した。一八八三年版にあって八六年版にない削除された四首は気にかかるところである。左に「摩山四詠為朝鮮李橘山作」となっている四首を引用する。

摩山何峩峩、家世表東海、草木皆君恩、況有賜書在
佩玉委厳廊、結廬在林下、堂廉契已深、思煞優遊者
湛湛退士潭、天光清見底、臣身退未能、臣心常若此
清香発四時、具曰主人楽、雅愛主人賢、次第開東閣

というように、二人の深い友情を称えるもので、大事な国事にかかわる内容ではなかったようである。

では、この後の国事に大きく影響する李鴻章⇔游智開⇔李裕元間の書信パイプはどのようにできたのでろうか。夫馬進氏によれば、「李裕元は高宗十二年（光緒元年＝一八七五）十一月七日、永平府城に宿をとり、この日の夜游智開と痛飲し、この機をとらえて李鴻章と関係を持つことを頼み込んだ。翌日には彼の部下を游智開のもとへ二度まで派遣し彼の意のあるところを伝えさせた。しかも游智開は李裕元の手紙を託され、これを李鴻章と会ったときに自ら手渡したのであった」となっている。[18]

大筋はこの通りである。游智開と李裕元の間の書信と『蔵園詩鈔』にある内容を総合して、さらに詳しく検証すると、李裕元と李鴻章が書信を往来させるようになった経緯は以下のようになる。すなわち、李裕元一行は帰国時に再度永平府に立ち寄り游智開を訪ねた。復路であるので、年が明けて一八七六年のはずである。この時は、既述したように、

朴珪寿の時と同じように、寺で宴会を開いた。無論、ここでは二人だけではなかった。のちに李裕元が游に宛てた手紙で、当日同席した許奭[19]と金石霞[20]の二人の近況を報告したことや、游智開が「邦人」が宴会のことを「盛事と称する」と記述したことから、大勢の人でにぎやかな宴席であったと推測される。そこで李裕元は游智開から「蔵園詩鈔」を贈ってもらった。時期的に考えると、これは現存するいずれの版本でもないはずである。李裕元は、そこに収録されている、游智開が天津にて李鴻章と面会した時に詠んだ詩[21]を見て、敬慕の念を覚えたという。そして夜に部下の金寅浩[22]を游智開のところに送り、李裕元の意を具体的に述べて、李鴻章に伝えてほしいと頼み込んだ。翌朝にまた篋（竹の箱）を一つ送ってきた。李鴻章に伝えてほしいという「李裕元の意」とはどんな内容であり、手渡した「篋」の内容物が何だろう。残念ながらこれについての記録がなく、直接確認することができない。游智開の同意を得た時に李裕元は、すでに帰途に就いていた。途中の小黒山から李鴻章宛ての書信を游智開に送り、このように記した。

「逢游知府憑探鈞体万安、有若拜於沐下、不勝仰喜、小生於海隅見無異坐井、焉有管窺乎、一游大方、平生足矣、天津遥隔末由晋候以聽鈞教、含俵帰国、妄因游兄数字仰累清聽、罪悚之極、僭越莫甚、若下答教、与栄無比、不任惶慄之至、不備謹呈、橘山李裕元再拜。白參一斤、清心二十丸、蘇合丸一百丸、三種微物、敢此表忱、悚甚悚甚[23]」

となっている。傍点の箇所で示しているように、游智開に伝言を依頼した李裕元は、李鴻章に対して、その伝言を聞いてから、教示してくれるよう申し出たものである。しかし肝心なこと、国事にかかわる重要なことはこの手紙には一切述べられておらず、游智開を通して聞かせたのである。翌月に李鴻章に会った游智開は、口頭で李裕元の意を伝えた、という経緯になる[24]。李鴻章からの返信は、対日開国について言及し、朝鮮と日本の関係の先行きを懸念しながら、「防備」する必要性を説いた内容であった[25]。このことから、李裕元が游智開を通して李鴻章に伝えてほしいといったこと、教示してほしいことは対日関係についてであったと推定して間違いないであろう。

また、李鴻章に贈った「三種」の贈り物は、前述した吉林将軍に送った「清心丸百個」を鑑みれば、驚くほどの量ではないようだ。

その後も李裕元は、朝貢使節やそれに随行する訳官に託して、游智開と李鴻章のもとに手紙、詩文、贈り物を送ったのである。李鴻章の一部の書信は、その幕僚である薛福成の筆になるものであったことはよく知られている。幕僚が代筆することは、清朝の政治家ではよくあることで、たとえば前述した瀋陽将軍崇実からの書信では、その息子が父の命を受けて代返したものであるとその手紙に書いてあった。李裕元の場合も同様に代筆が見られた。小黒山から游智開に宛てた書信は、「侍史」の許奭による執筆だそうで、「極有風格」と游智開の称賛を得た[26]。

しかし朝貢使節に託した書信は、使節がたくさんの荷物を携行するため、使節により別途に送られて遅れることもあった。一八八一年四月に、前年派遣された進香使の洪祐昌がすでに帰国したが、託された游智開からの書信は後に運ばれて来る荷車にあるため、未だに拝見できず、待ち

わびていると李裕元が述べている。[27] 洪祐昌と会った時に李裕元は、游智開が自分の還暦に詠んだ詩（『蔵園詩鈔』三五頁に収録）に唱和して、また游智開に送り返した。[28] 游智開はこれを受け取ってさらに和した詩は四〇頁にある「橘山寄和六〇初度詩因畳韻答之」である。こうした詩文の往来も、李裕元⇔李鴻章間のパイプの継続を支え、のち李鴻章が朝鮮にたいして政策助言を行うことを可能にした。[29]

実は、李裕元は清の文人と詩文を唱和することが苦手だったようである。彼はかつて清に派遣される朝貢使節に、清に行けば、「三貧」に出くわすだろうと語った。「三貧」とは、「言貧」、「文貧」、「銀鈔貧」のことである。言葉が不自由であることから「言貧」に、朝鮮の人々が好んで購入する古董品は贋品が多い上に値段が高いことから「銀鈔貧」になるという。そしてもう一つの「文貧」は、漢詩を作成する時に、朝鮮の人に比べて清の文人ははるかにスピードが速いため、漢詩を詠むのに時間かかる朝鮮の人は遅れて、「文貧」を感じるという。故に李裕元は「不可與彼人作詩」と忠告し、若し自分が再度清に行くことになったら、「三貧之苦」から逃れるために、必ずや「聾耳於覘覿、閉口於吟哦、鎖眼於物貨」と、「聞かざる、言わざる、見ざる」を誓っていたのである。[30]

にもかかわらず、李裕元は游智開との詩文唱和を怠らず、游との関係を重視し、大事にしてきた。李の文集には、他にも游智開に贈った詩が確認できる。[31] 一方、『蔵園詩鈔』六五頁に游智開が李裕元のことを案ずる詩が書かれている。

「輿図歴歴指朝鮮、俄北倭南界併連、看到橘山遷謫處、不禁却立意悽然」

と、失脚した李裕元のことを気にかけた。直接の連絡がすでに途絶えた後の作品のようであるが、李裕元はこの詩を見て、さらに

「北是燕京東是鮮、両居落落一心連、多君何事輿図指、人在天涯独惘然」

と唱和した。[32] 卞元圭の刊行した『蔵園詩鈔』は、李裕元も見ていたことが分かる。この詩は李裕元と游智開の友情の証であるが、述懐するきっかけがあるからと推察する。そのことは、この詩と一緒に「李太傅座間即事」と題したもう一首の作品で語っている。すなわち、

「連朝為客籌東海、過耳帰鴉躁晩天、官燭両行燒又盡、相公猶手草苔箋」

である。李鴻章が連日昼夜を問わずに、朝鮮のことに尽力をしている様子を描いている。多少オーバーの表現があるかもしれないが、李鴻章と游智開が、朝鮮に関して討議をしたことは事実であろう。

⑤金鰲玉

『蔵園詩鈔』にはまた、「和朝鮮使臣金鰲玉蝀橋玩月」（三七頁）の一首がある。蝀橋は北京西苑にある地名である。金鰲玉については人物の確定ができないが、詩の配列と前後関係から奏請副使として李裕元に同行していた金始淵（一八一〇～没年不詳）であると推測する。金始淵は文筆に優れ、一八四二年に奎章閣直閣となっていた人物である。

⑥閔種默（一八三六～一九一六年、字は玄卿、号は翰山、本貫は驪興）

一八八六年以降の版本に題が「贈朝鮮使臣閔翰山」という閔種默に関する七言律詩三首がある。三首の詩の前には、作詩の経緯が記されている。閔種默は一八七六年に副使として清を訪れていて、その時に一度游智開に会って、詩を唱和したという。一八八五年に閔種默は陳奏使として再度清に赴く際に、永平を通ったが、このとき、游智開がすでに知府の職を離れていたため、会うことができなかった。残念に思った閔種默は游智開に書信を送り、元夕（正月十五日）に天津に行き、二人はそこで九年ぶりに再会した。無論、ここでも宴会は欠かせない。二人は痛飲し、また「接坐細談当世事」（七〇頁）と、隣り合って坐り、最近の出来事を話していた様子が、詩文を通してうかがえる。具体的に何の「当世事」について詳しく話していたのであろうか。詩は続いて、「臨岐重訂再来縁、矧今朝命綏藩服」と綴っている。一八八四年に起こった甲申政変の後、李鴻章は朝鮮の人心を収攬するために、前々年の壬午軍乱に清に連行した国王の実父大院君の帰国を認めることにした。そこで李は朝鮮に、まず返還を懇願するようにと勧告し、そして朝鮮からの懇願があれば、すぐに帰国させるとの意思を示した。閔種默はこうした李の意向を受けて、一八八五年に陳奏使として派遣されてきた[33]。「朝命が藩服を安定させる（朝命綏藩服）」との句があった故である。「当世事」とは、こういった時事を指していると推察する。

⑦国王高宗

『蔵園詩鈔』の中で特に注目したいのは、国王高宗に贈る「雙剣奉答朝鮮国王」（五七頁）の一首である。

齊宿求良冶、候霊鋳精鉄、雙雙寶匣間、忽覩明星列、摩挲重装飾、
綴以黄金屑、憑藉使君賢、進献陳言説、干莫光燭霄、匪但蛟可截、
連朝淬礪之、一揮敵氛滅、坐撫滄海東、顧盻雄且傑、要之自強術、
利器用尤別、柄操掌握中、時局默参閲、廷議多異同、群疑苦紛結、
維王秉神武、従違立断決、狡如倭與俄、聞風默心折、斯剣由神授、
安用相彼薛、持此頌明王、累葉昭光烈、大哉宋玉言、倚天喩非設

と、ほかの詩より長く、朝鮮の朝議にまで言及した内容もあって一際目を引く。特に「自強のために特別な利器を用いるべきであることと、政権を自らの手に掌握し、時局を詳しく諮り、英明と武勇をもって紛々たる議論がある中で、英断を下す」ことができれば、「日本とロシアのような狡いものも、それを聞いて黙って心服するであろう」と述べているところは、一八七〇年代後半から李鴻章に代表される清の対朝鮮政策と軌を一にしている。

この件に関して、游智開は「朝鮮は貧弱であり、日本が東にロシアが北にいて、強大な隣国に挟まれているため、たびたびその国相（李裕元のことを指す）に書を送り、大いに政治改革を行い、自強をはかるようにと言いつけたという。合肥の李太傅（李鴻章のこと）もまた西洋と通商し、強隣を牽制する策を勧めたが、朝鮮の朝議は統一見解に達していなかった。光緒六（一八八〇）年冬、国王が臣下の卞元圭に、私に手紙を送るよう命じて、経典書籍や生薬などもご恵贈くださった」と述べて（五七頁）、国王への答礼として剣を鋳造して贈ることにしたと、その経

緯を述べている。

ここから読み取れることは、李裕元と清の官員の間のやり取りを国王が承知であり、書信や贈り物を伝達している卞元圭の行動も、国王高宗の意思を反映しているものと考えられる、ということである。

また、一八九四年以降版では、冒頭の「朝鮮貧弱、倭東俄北強隣逼處」の一文を、「朝鮮雅尚文学、強隣逼處」と表現を変えている。

⑧卞元圭

最後に、朝鮮国王の意を游智開に伝えてきた卞元圭についてみることにしよう。Ⅱの1．で既に述べたように、卞元圭は『蔵園詩鈔』を印刷に付した人物である。その名前が『高宗実録』に見られるようになったのは、一八八〇年代以降であり、それ以前の行動については、朝鮮側の資料では見出すことができない。清の董文渙[34]が編纂した詩集『韓客詩存』（書目文献出版社、一九九六年）に、朝鮮の使節と唱和した詩文が多く収録されている。その内容から、卞元圭が一八六五年から一八七五年までの間に、朝貢使節に同行して清に赴き、清の官僚や文人と交流したことが分かる[35]。朝貢使節に関しては、正使、副使および書状官の三人の名前は記録に残るが、訳官やその他の随行員の詳細については知られることが少ない。こういう意味においても『韓客詩存』は貴重な一次史料と言える。その検討については別稿にゆずって、『蔵園詩鈔』にある卞元圭に関する詩文は、他の人物をはるかに上回る量で、五五頁から三丁にわたる紙幅をとっていた。

最初の言及は五五頁にある「贈朝鮮卞元圭」である。ここでは一八七九年十二月二十七日と日付まで記して、旅に出かけてその道中にいる游智開を、卞元圭が五鼓の時（早朝五時頃）に旅館の門の外で立って待っていたという。真冬の早朝、まだ真っ暗だったのではないか。二人は空が明るくなってから分かれた。

これが二人の初対面かと思われるような記述だが、そうではなかったようである。卞元圭の訪清は遅くとも一八六五年から確認することができ、一八七二年に朴珪寿に随行した訳官の中に卞元圭がいたのである[36]。仮に大勢の朝貢使節団の中にいて、游智開が卞元圭のことが分からなかったとしても、卞は游を知っていたであろう。単にあいさつに来たのか、それとも李裕元から何かの伝言を預かっただろうか[37]。いずれにしても一八七九年の冬に、游智開を訪ねてきたことは間違いない。

この時卞元圭はすでに十数年の経験を持つベテラン訳官であるはず。しかし五五頁に「雲官副司直」の五言絶句に「言梗藉筆談」とあるように、時々筆談を介して交流しなければいけないようである。それでも二人の間は「懇切無匿情」で、すべてを打ち明けることのできる仲であるとも記してある。一八八〇年春に卞元圭は朝鮮に帰る途中でまた游智開を訪れ、その後八月に、兵匠を率いて天津にて武備を習うことを懇願するために再来した（五五頁）。このとき游智開はすでに、近いうちに天津にて再会することが分かっていた（五六頁に「津門会言近」とある）。そして天津でまた詩を唱和し、「朝鮮得請於朝（清国のこと）遣官送使臣卞元圭往天津、傳相李公命智開同鄭玉軒、許涑文、王筱雲、劉薇林諸観察、與使臣会商連日、偏観機器軍械各局、約明歳率兵匠来津学習」と記しているところから、事前に李鴻章の命令を受けて、天津械器局の諸

官員と一緒に、翌年の兵匠学習の件で詳細を詰めていたようである。

その時の様子を、一八九四年の版本に追加された「寄懐卞吉雲」の一首でも描いている。「光緒六年秋、李太傅命與吉雲会議於天津、事畢置酒、時黄花盛開、羅列屏障、因用西法写照、各摹一紙」と、議論の後に酒席を用意し、西洋の画法でともに絵を描いたことを回想し懐かしんでいた。

『蔵園詩鈔』の内容を検討して、明らかになったように、游智開が朝鮮と具体的に関わるようになったのは、李裕元との交流からで、李鴻章への仲介役で深まり、「兵匠の来津学習」（学造器械事）を機にピークを迎えた。

Ⅲ．領選使の派遣

1．「学造器械事」の決定

――李裕元の意向から李鴻章の意向へ、そして「朝鮮の要望」に――

朝鮮では、大院君執政の時代から武器の改良が試みられていた。高宗が親政すると、大院君の推進した政策をことごとく否定したが、軍備強化策だけは受け継がれた[38]。一八八〇年代に入ってから、朝鮮は「武備自強」を目指し、兵器の購入を急務にしていた。しかし、宗属関係を結んでいる清と、「日朝修好条規」の締結によって刷新された隣国日本と以外には、外交ルートを持っていない。また、清との間に行われる貿易品目、数量に関しても細かく規定されていた。朝貢貿易の取引禁止品目としては、史書、贅沢品である蓮緞や牛角などのほか、兵器、火薬があり、厳しく取り締まられている[39]。他国（専ら日本）を通しての購入は、清との関係に悪影響を及ぼす恐れがあったようである[40]。無論、資金の調達も一つの課題であった。故に、朝鮮の「武備自強」の実現は決して簡単なことではなかった。

「武備自強」は李鴻章が李裕元宛ての書信で、対欧米開国と並行して勧告したことでもある。李裕元は開国に応じなかったが、「武備自強」に対しては受け入れる姿勢を示した。しかしこのことは李鴻章に直接伝えるのではなく、游智開宛の手紙や李容粛の口伝によってなされた。一八七九年十一月に李鴻章は上奏文「籌朝鮮」の中で、

「齎咨官李容粛復与游守（游智開のこと）籌商欲来謁晤、将製器錬軍等事面陳一切、（中略）並云李裕元信中有要務細細面白者、蓋因該国輿論擬仿古外国入学之例、咨請礼部、揀選明幹人員在天津等処学習軍器武備」

と述べている。一八七九年の段階で、李裕元の游智開宛ての手紙から朝鮮は「明幹人員」を選んで、天津などで「軍器武備」を学習する意図があると、李鴻章は理解していた。しかし具体的な方法は示されておらず、また詳細に述べたいという「要務」の内容も不明である。李鴻章は詳しいことを聞こうと、適当な人物に李容粛を天津に護送して来るようにと游智開に命じた。ところが、游智開が送った護送者は北京より、李容粛の手紙だけを持って引き返してきた。その手紙には「未充使者、出入不得自由、躊躇中止」と書いてあり[41]、つまり、李容粛は朝貢使節に同行する訳官で自由に行動できないという理由で、天津にいる李鴻章を訪問することを断念したとのことだった。しかしこれは口実に過ぎなかった。

李容肅（一八一八～没年不詳、字は敬之、号は菊人、本貫は全州）は卞元圭と同じく、訳官として頻繁に清に訪れていた人物である。一八六六年のシャーマン号事件や第一次・二次修信使の日本行きに同行するなど、一八六〇年代から八〇年代にわたり長く朝鮮の対外交渉に携わっていた。李容肅もまた清の文人や官員と広く交遊し、唱和した詩文も多く残っている。一八七二年に朴珪寿に同行した訳官の中に卞元圭のほか、李容肅の名前も確認できる。[42] それにも拘わらず、李容肅はこの時だけ、訳官であるために自由に行動できないという理由で李鴻章を訪問するのをためらって断念した。自ら拒否したか、何らかの理由で行くことができなかったか、のどちらかと考えられる。前述したように、李容肅は朴珪寿に同行していたため、この時以外にも游智開と接点があったはずだが、『蔵園詩鈔』では彼についてまったく言及されて触れられていない。

これと対照的なのは卞元圭である。前述したとおり、『蔵園詩鈔』には一八七九年十二月と翌年春の二回、游智開を訪ねてきたと記録されている上、多くの紙幅を割いている。游智開の記録が間違えていなければ、李容肅は卞元圭と同じ時期に游智開を訪問してきたことになる。つまり、光緒五年の冬至使韓敬源に同行して清に入ったのである。

李鴻章は李裕元に、時候の挨拶のみの返信をして、別途游智開に書簡を送った。朝鮮側に、要望の件は実行可能であることと、そのためにまず礼部に咨文を送るように伝えること、そしてその咨文が総理衙門に回されてきてからこちらで適宜に処理すると伝えるように告げたのである。[43]

冬至使一行が朝鮮に戻ってきて一八八〇年四月三〇日に、この件はさっそく審議にかけられた。司訳院から、「以軍器貿用與学習之意、移咨中国事」で啓を呈して、学習の件と、これまでの朝清間で取引禁止とされている武器の購入も合わせて、清に咨文を送り、許可を求める提案が出された。諸大臣の意見を聞いたところ、李裕元は、

「近日則海外諸国挙皆留住燕京、非学也、乃通商也。臣於年前入燕也察其動静、則倶以其国之規模習之、未聞以中原之学習之。皆局於其見」

と、最近、北京に海外諸国の人がたくさんいるが、自分たちの見識にしたがって行動しており、清に学習する目的の者がいないと指摘した。そのため、朝鮮の学習実行できるかが懸念されると述べた上で、「且以財力言之、似無以支策」と経済的に困難であるが、今は「有此下問」（略）、「為今之計、先得其人、又聚其財」と、せっかく清から「下問」としての助言があるので、人材の獲得を優先にすべきとの考えを示した。ここで「下問」を発した人物は明かされていないが、経過から見れば、李鴻章であることは間違いないであろう。

ほかの大臣も同様に経済的な面を懸念し、初めてのことであるため、清に咨文を送ることに慎重であるべきとの意見を示した。そこで領議政の李最應が、

「今此咨文事、非但剏例之極渉慎重、中国許咨、有未可愚度。（中略）且移咨事体、與使臣呈文軽重迥殊」

と述べ、これが初めての事例であり、きわめて慎重に運ばなければなら

ないとしたうえで、清に咨文を送っても、許可してもらえる見込みがないとした。また、送る咨文は、使臣、つまり清から帰ってきた朝貢使節一行の中の者が、呈した文と重みがはるかに異なるのだと述べた。

ここで「使臣」とは誰のことを指しているのか。提案者は司訳院であることを考えると、訳官のことであろう。「使臣」の「呈文」は李鴻章から游智開に宛てた手紙を記録したものか、それとも游が李の指示を受けて朝鮮側に書いた文章か、結果として李鴻章の意見は游智開を経由して、朝鮮に伝わってきたようである。大臣たちの慎重を期する意見が多い中、国王高宗が、初めてのことで拒まれた例がなく、況してこのことが「学造備禦」の策によって出されたことであるから、適宜に処理すべきだとして、清に要望する咨文を送ることを決定した[44]。李鴻章の意向は高宗の軍備強化政策と合致していたからである。

ここにおいて七月九日に、亟やかに「明幹人員」を選送して天津廠等のところで「学造器械」すると同時に、清からも「解事人員」を揀選し、教官として朝鮮に教えに来ることを願い出る咨文を送ることにした[45]。先に見た李鴻章の文章に引用されている李裕元の言葉――「揀選明幹人員」などの表現が、そのまま使用された。咨文が李鴻章の意見に沿うものあったとの証しであると同時に、それがもともと李裕元の言葉であることを忘れてはならない。そして、咨文を携行する齎咨官は卞元圭となっている。

こうして、一八七九年李裕元が李鴻章と交わした書信の中で浮上した「製器錬軍」のために、「揀選明幹人員」を天津に派遣するという李裕元の意向が、まず朝鮮の訳官李容肅と游智開によって李鴻章に伝えられた。李鴻章はこれを受けて、「咨文を以って清に懇願する」形にして、実現させていく意向を示し、反対方向ではあるが同じルートに沿って朝鮮に伝えられた。

李裕元は国内の意見が一致せず、錯綜している中で、李鴻章と書信を往来する機会を活用して、「学造器械事」を実現させた。しかし朝鮮の大臣として、数回書簡を交しただけの宗主国の重臣に直接胸の内を明かすことができない。そこで李裕元は、訳官に「製器錬軍」する意向を口伝するよう命じ、游智開への書信で「学習製造、練兵、購器」する意向を漏らし、間接的に李鴻章に伝わることを期待したのであろう。こうして李裕元の考えが李鴻章に受け入れられ、さらに助言をもらうこととなった。

訳官を通して李鴻章の助言が朝鮮に伝えられると、それまでの過程を明かさないまま、「清の李鴻章の意向（下問）」として朝議に付した。そこで李裕元をはじめとする諸大臣と国王の議論は、「李鴻章の意向」を受けいれるという結論に至った。ここから朝・清関係の公式外交ルートに乗せて、「朝鮮側の要望」として、清に咨文の形で伺いを立てたのである。清に新式兵器の製造を学習するという政策は、このようなプロセスを経てようやく決定された。その中で游智開と訳官が果たした役割が非常に重要であったことは、論をまたない。

2. 領選使の派遣

一八八〇年八月に、訳官卞元圭は「懇請派人来津学習製造練兵等事」の咨文を携えて清に再来した。『蔵園詩鈔』にもあるように、卞元圭は

まず途中で游智開を訪問した。そこで、游智開と天津でまた互いに会えることを聞いた。卞が九月に天津に到着すると、游智開は李鴻章の指示にしたがって、天津械器局の二品官員四人、鄭藻如（一八二七～一八九四年、字は志翔、号は豫軒、玉軒）、许其光（一八二七～没年不詳、字は懋昭、耀斗、号は叔文、涑文）、王徳均（生没年不詳、字は筱雲、筆述書に『繪地法原』、『開煤要法』など）、劉含芳（一八四〇～一八九八年、字は蘅林）を引き合わせてくれ、天津械器局、製造局、軍械所および西沽儲備火器庫、火薬庫などを游と一緒に見学した。また、翌年に学徒を派遣することを約束して、機械製造および兵士の教練についての詳細を詰めた。[46]

このことは卞元圭によって朝鮮に報告され、『高宗実録』にも記録されている。[47]のち国王から李鴻章、游智開のほか、右に挙げた械器局の四人にも贈り物があった。[48]このことから、現場で清との交渉に当たっている一訳官の卞元圭は、国王と直接つながっていたことが分かる。

そして九月二十七日に、卞元圭は李鴻章と筆談を行い、携えてきた李裕元の書信も手渡した。李鴻章は李裕元宛ての書簡の中で卞元圭について、「卞君明敏多才、虚衷善問」と高く評価している。[49]筆談においての印象は良かったと思われる。

李裕元の書信には礼単（贈り物の目録）も添付されている。これまで見てきたように、朝鮮と清の官員の間に往来する書信に、互いに贈り物を付けていることは、ごく普通のことのようである。しかし、今回の贈り物の量は一際多く、李鴻章も受け取って良いものかどうか、戸惑ってしまったようである。このことに対して李鴻章は、「思うに、図ることの係わりが頗る重大で、事前に誼みを連ねたいからであろう」と、ほかに重大な要求をしてくることを心配して、これを受け取るのを躊躇していた。[50]朝鮮では「学造器機事」の咨文が清に受け入れてもらえないかもしれないとの懸念があったことを知らずにいたからであろう。李鴻章が不安に感じるほどの大量の贈り物をしたということは、李裕元がその結果成敗を非常に重視していた証であろう。

卞元圭は「学造器械事」のみならず、日本との関係、ロシアへの懸念から辺境軍事設備を増強する必要性などについても李鴻章に意見を聞いた。[51]これに対して李は、対外関係において憂慮すべきことが多いため、「学造器械事」については、「学習製造、練兵、購器」の三点を連動して早急に進める必要があるとした。また察するに、朝鮮国王の意図は、朝鮮の人が清に来て学習させる（「来学」）よりも、機器を購入し、教官を招聘して朝鮮に行って教えてもらう（「往教」）ことにあるようである。しかし今は「往教」よりも「来学」のほうが適切であると話した。そして、今後武器を購入する際に参考になるだろうとして、朝鮮にボルトライフル銃十丁、モーゼル十丁、弾丸二千発等を贈った。[52]

このように、徹底的に根回ししたおかげで、拒否されるかと心配していた「派人来津学習製造練兵等事」は、皇帝の裁可を得て、九月二十九日に礼部を通して回咨が出た。[53]卞元圭はこれを携えて一八八〇年十一月に朝鮮に帰った。

同年の冬至使に同行して李容粛は、游智開を訪問して、「為学習武備等事、開列各條、来津稟候中堂示遵」と、再度李鴻章に意見を伺いたいと申し出た。そして翌一八八一年一月二〇日に李容粛はついに、李鴻章

に会うことができ、「学習武備」に限らず、様々な問題について李鴻章の意見を聞けたのである。「学造器械事」にしぼって言えば、黄遵憲の『朝鮮策略』にあるように、「北京の同文館にて西洋の言葉を習い、直隷にて淮軍の兵を習い、上海製造局にて器械製造を学び、福州船政局にて造船を学ぶ」と、学徒の派遣を天津に限らず、各地にて幅広く学ぶ意向を示し、その可否について聞く内容であった。[54] 一見それまでの卞元圭による交渉を変更したようであるが、実は、李容肅は第二次修信使の金弘集に同行して日本に行ってきたばかりである。「はじめに」で述べたように、金弘集はこの時に黄遵憲執筆の『朝鮮策略』を朝鮮に持ち帰ったのである。先行研究の一部では『朝鮮策略』が「学造器械事」を実現させた契機の一つとしている。この点は李容肅の言動によって証明されている。朝鮮は「学造器械事」を『朝鮮策略』にある助言に沿って検討したが、しかし李鴻章は上海と福州に往って学習する必要性がないと考え、経費の問題などをも挙げて、李容肅の提示した案を否定した。[55] そのため、予定通りに天津のみに学徒を派遣することになった。

李容肅が帰国した直後の三月二十九日に「吏曹参議趙龍鎬率匠工送赴天津」の咨文が清に送られてきた。しかし趙龍鎬が突然死亡したため、引率者を吏曹参判に昇進した金允植に変え、「領選使」と命名した。[56] 同じ日、日本に国書を奉呈するために派遣する使節を「信使」と称することを決めた。「交隣」関係にある日本と清との関係を意識した名称である。[57]

こうして領選使金允植が率いる学徒・工匠は天津に向かった。清に報告した人数は一行六十九人で、領選使以下は、従事官の尹泰駿、つづく官弁が白樂倫、訳官が崔性学であった。卞元圭は「別遣堂上」となっている。

なお、この卞元圭の経歴には怪訝に思われる点があるが、それは、卞の官職・品位の急な変化である。一例をあげれば、金弘集から駐日清国公使の何如璋に宛てた手紙（一八八一年二月三日付け）に、統理機務衙門の組織図が添付されていた。人事、官職名から見ると、一八八一年一月二八日から二月三日までのものだと考えられ、時期は少し離れているが、そこに卞元圭は従一品の「参事」と記されている。また、同じく従一品の参事として名前が書かれている金景遂（『公報抄略』の著者）、元昔運（不詳）、李応憲（『華音啓蒙諺解』の著者）は、いずれも訳官であった。[58] 游智開は『蔵園詩鈔』の中で卞元圭の官位を「副司直」（従五品）と書いている。これはおそらく、卞元圭の自己紹介によるものであろう。官位の急な上下が、執務の実態を反映していると考えにくい。対外交渉の便宜上にそうしたのか、統理機務衙門が「近代化」をはかるために新設された官庁であることを考えると、実に興味深いことである。

領選使一行は一八八一年十一月に北京に到着し、十二月四日に学徒が各局に配属された。この時游智開はすでに永平府から離れて永定河道になって保定にいたが、領選使一行との交流を続けた。

金允植が日記の形で著した『陰晴史』の中で、卞元圭と游智開を介して、多くの清の官僚や文人と交流したことが記録されている。游智開との出会いからいくつか挙げてみよう。

金允植は、游智開と会う前の十一月二十三日の日記に、游について「卞元圭から游智開が我が国事の為に、屢々李中堂との間を介していた

と聞いた。卞元圭との親交がもっとも深く（「契分最深」）、国王からも贈り物があって、その量は李鴻章宛の次に多く、十六種類もある」と記録し、高く評価している。

そして翌二十四日の日記によると、朝鮮からは金允植、尹泰駿（石汀）、白樂倫（兼山）、卞元圭（吉雲）、清からは游智開、永定南岸同知桂本誠（号は礼堂居）、北岸同知豫復（号は崑山居）、一同は会って宴会をした。この席で、游智開は自分の詩集『藏園詩鈔』を見せたが、中に「宝剣篇」とともに、卞元圭に贈る詩が五六首あったという。「宝剣篇」は前述した「雙剣奉答朝鮮国王」（五七頁）のことである。恐らく、卞元圭はこの時もらった詩稿を朝鮮に持ち帰って印刷したのであろう。国王へ贈った詩が、自分へのものと一緒に並ぶだけでも、卞元圭にとっては特別な意義があったのに違いない。

金允植一行が昼過ぎに宿所に帰ると、游智開はすぐに来訪し謝意を伝えた。その後金允植もまた宴会で同席した同知の官署を訪ね、あいさつした。同知らがまた返礼に来て、こうして夕刻になった。夕食後、金允植は卞元圭と一緒に灯籠もって再び游智開を訪ねた。ここで初めて筆談を交わし、一行の目的を伝えたのである。それは、「領選使」の担う任務が「学造器械事」だけではなく、国王から密命を受けて、アメリカと条約を締結する任を負っていたためであった。[59] こうして面会を数回重ねてから、ようやく本題に入ったのだった。

二十七日になって游智開に李鴻章との面会を斡旋してもらい、次のように述べている

「為之講習接見之禮、辛勤備至、或恐失措、且於中堂有所祈請事、一一代爲周旋、不惜勞苦、藏園之於我東、不翹秦越之相間、而若是苦心、無異骨肉、誠可感也、卞吉雲云、藏園於我輩、如新嫁娘之傅母、真格言也、極為感銘。」

このように、親身に世話してくれた游智開のおかげで、李鴻章ともスムーズに交渉することができたと、感激していた。游智開はまた他の官員を紹介したり、各處への贈物の量を助言するなど、世話をしてくれたとのことだ。

領選使一行はこうして無事に天津にたどり着き、「学造器械事」を開始し、また対米条約の交渉にもあたることとなった。

Ⅳ. おわりに

清の一地方官である游智開は、朝鮮の訳官から大臣、国王までと幅広く交流をしてきた。これは朝鮮と清との関係において、特異な事例かもしれない。その要因としてはまず「西洋の衝撃」を受けて、朝鮮の対外関係に大きな変化がもたらされた一八七〇年代後半という時期が挙げられる。また、游智開が清の実力者の李鴻章とつながりを持っていたということが、決定的であったと言って良い。

游は、一八七二年に永平府に就任してきてから、朝貢使節そして随行する朝鮮の人々と宴会を開き、詩文を詠んで、土産を贈与し合って交流してきた。これは珍しいことではないが、変化は一八七五年に冬至使李裕元との交流から始まったのである。李は游智開が天津にて李鴻章と面会した時に詠んだ詩を見て、李鴻章との仲介を依頼した。これをきっか

けとして、李裕元と李鴻章との間に、書信の往来が始まった。李鴻章は書信をもって、清の安全保障のために、朝鮮に対欧米開国と武備自強を勧めた。一方、李裕元の返書でははっきりその意見を述べないことが多かったが、真意は游智開を通じて伝達していた。そしてともにその役目を果たしたのは朝鮮側の朝貢使節と訳官であった。

本稿ではとりわけ、長年、朝貢使節に同行し、游の詩集『蔵園詩鈔』を刊行した訳官の卞元圭に注目した。『蔵園詩鈔』は本稿で初めて取り上げられた資料で、第Ⅱ章でその内容について分析し、游智開と朝貢使節が、具体的にどのように交流をしていたのかを紹介した。それは単なる交流ではなく、時には両国の政治問題について語り合っていた。

李鴻章と李裕元との間で意見交換が行われる中で、清に、武器製造の技術などを学ぶ「学造器械事」が浮上した。第Ⅲ章で述べたように、李裕元を代表とする朝鮮側の考えが、戦略的に李鴻章の意向と化して、再度朝鮮に伝えられた。朝鮮は李鴻章の意向を受け入れる形で、従来の朝・清間の外交ルールに従って、清に咨文を送り許可を求める形をとった。このような経緯で「学造器械事」が実現し、領選使が清に派遣されたのであった。

本稿は以上のように、領選使の派遣をめぐっての政策決定過程およびその中で見られた人的要因に注目し、游智開と朝鮮の朝貢使節の交流を通じて、朝鮮と清の人的ネットワークを検証した。従来の研究では、游智開の仲介によって李裕元と李鴻章が結ばれていたことが明らかになっていたが、本稿の検証を通じて、さらに中には訳官が参与していた実態が明らかになった。また、訳官たちの間、訳官と游智開、また、その訳官の先に国王がつながっている、という複線的な関係も論証した。しかしこれはまだ朝・清間の宗属関係の下にある複雑な人的ネットワークの一部に過ぎない。李鴻章側に書信を代筆した幕僚や、領選使一行の学習を受け入れる要務を果たした官員たちが、どのように朝鮮とかかわっていたのかという点は未だ定かではない、今後の課題として、引き続き全貌の解明に努めていきたい。

注

（1）田保橋潔『近代日鮮関係の研究』、第三十一「清韓関係の新段階　李鴻章と李裕元」（朝鮮総督府中枢院、一九四〇年）、五四五頁。

（2）「朝鮮李裕元『薊槎日録』に見える中国李鴻章との交渉について」（京都大学文学研究科二十一世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成・東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」ニューズレター第一号、二〇〇三年五月）。

（3）五百十里は約二百キロである。『増補文献備考』（明文堂影印版）巻一七七、交聘考七「燕京旅程」による。一里は三百六十歩、約三百九十二メートル。なお、一八八一年十一月に領選使の一行は永平を出て三日目に北京に到着した。

（4）原田環『朝鮮の開国と近代化』、第七章「朝・中『両截体制』成立前史――李裕元と李鴻章の書簡を通じて」（渓水社、一九九七年）一九六頁。

（5）吉田光男編『韓国の歴史と社会』（放送大学教育振興会、二〇〇四年）「開国政策の展開と東アジア世界の再編」（月脚達彦氏執筆）一一二頁。

（6）權錫奉『清末対朝鮮政策史研究』（一潮閣、一九八六年）「領選使行考」一四五頁、金正起「一八八〇년대　機械局・機械廠의 설치」（『한국학보』一〇、一

九七八年）、朴星来「開化期의 科学受容」（『韓国史学』一、一九八〇年）。

（7）前掲權錫奉書一五三～七頁、이상일「김윤식의 개화 자강론과 영선사 사행（使行）」（이화여자대학교한국문화연구원『한국문화연구』十一、二〇〇六年）、김연희「영선사행 군계학조단의 재평가」（『한국학연구』一三七、二〇〇七年）。

（8）前掲權錫奉書一六〇～一頁。

（9）『修信使日記』（国史編纂委員会、一九五八年）巻二、一六七頁。

（10）『高宗実録』高宗十七年七月十九日条。

（11）『承政院日記』光緒七年二月十日条。

（12）生没年不詳。烟台の人。一八六五年に科挙に及第し、進士になる。

（13）『蔵園詩鈔』一八八六年以降版、六五頁。

（14）李裕元『嘉梧藁略』冊十一、「答游天愚 智開書」（『韓国文集叢刊』景仁文化社、一九九三年）四三一頁。原田環氏によれば、この手紙を書いたのは一八七六年七月と推定されている（原田環前掲書、一九三頁）。

（15）「橘山寄和六〇初度詩因畳韻答之」、『蔵園詩鈔』四〇頁。

（16）前掲李裕元『嘉梧藁略』四三三、四三七頁による）。

（17）前掲李裕元『嘉梧藁略』四三〇頁。

（18）前掲夫馬進「朝鮮李裕元『薊槎日録』に見える中国李鴻章との交渉について」。

（19）許奭（一八三八～一九一〇年）は弘文館校理、奎章閣副提学を歴任。一八九五年九月十四日に税務視察官になった記録が見られる。

（20）不詳。後出する金寅浩のことか？

（21）『蔵園詩鈔』「左洛靖候会李太傅於天津 太傅招智陪飲 詩以紀之」（一八八三年版、五八頁）。

（22）金寅浩については、一八八五年に慶尚左水使である（『高宗実録』高宗二二年八月七日）こと以外、知られていない。

（23）『李鴻章全集』（中国海南出版社影印、一九九七年）訳署函稿四、「朝鮮使臣李裕元来函」。

（24）前掲李裕元『嘉梧藁略』四三一～二頁。

（25）『李鴻章全集』訳署函稿四、「覆朝鮮使臣李裕元」。

（26）前掲李裕元『嘉梧藁略』四三一～二頁。

（27）前掲李裕元『嘉梧藁略』四三六頁。

（28）前掲李裕元『嘉梧藁略』一六六頁。

（29）詳細については前掲原田環『朝鮮の開国と近代化』、第七章を参照。

（30）前掲李裕元『嘉梧藁略』四二八頁、與年貢使鄭穉仲書。

（31）前掲李裕元『嘉梧藁略』一八一頁、「秋風憶蔵園主人」。

（32）前掲李裕元『嘉梧藁略』一八九頁。

（33）申基碩『韓末外交史研究』（一潮閣、一九六七年）二六五～二九三頁。

（34）董文渙（一八三三～一八七七年、字は尧章、号は研秋または研樵）は清末の政治家、文人。咸豊帝の「帝師」を務めた。

（35）董文渙編、李豫、崔永禧校正、明清中韓文化交流史料叢編『韓客詩存』（書目文献出版社、一九九六年）、六八頁、三三二頁。

（36）前掲『韓客詩存』、三四七～三五一頁。

（37）前掲李裕元『嘉梧藁略』四〇と一六六頁の記述から、李裕元と卞元圭は交友関係にあることがわかる。

（38）裵亢燮『一九世紀朝鮮의 軍事。度研究』（国学資料院、二〇〇二年）、연갑수『고종대 정치변동 연구』（일지사、二〇〇八年）。

（39）『欽定大清会典事例』巻五一一、礼部、一一八五六頁。

(40) 金正起「清의 朝鮮에대한 軍事政策과 宗主権」(『邊太燮博士華甲記念史学論叢』一九八五年)八九〇～一頁。

(41)『李鴻章全集』訳署函稿四、「籌朝鮮」。光緒五年十一月十三日。

(42) 前掲『海客詩存』二四～三五頁、三一五～三五〇頁。

(43)『李鴻章全集』訳署函稿四、「籌朝鮮」。光緒五年十一月十三日。

(44)『高宗実録』、『日省録』高宗十七年庚辰四月三〇日条。

(45)『高宗実録』高宗十七年庚辰七月九日条。

(46)『庸盦文別集』「代李相伯妥籌朝鮮造器練兵疏」(四三～四七)頁。

(47)『高宗実録』高宗十七年庚辰七月九日条。

(48)『陰晴史』(国史編纂委員会、ソウル、一九五八年)二八頁。

(49)『庸盦文別集』一九八頁。

(50)『庸盦文別集』一七頁。

(51) 中央研究院近代史研究所編『清季中日韓関係史料』三四一―(一)。(文書番号、以下同じ)中央研究院近代史研究所、台北、一九七二年。なお、以下は『清季中日韓関係史料』を『中日韓』と略す。

(52)『庸盦文別集』四四～四五頁。

(53)『中日韓』三五九―一(文書番号、以下同じ)中央研究院近代史研究所、台北、一九七二年。なお、以下は『清季中日韓関係史料』を『中日韓』と略す。

(54)『中日韓』三五二。

(55)『中日韓』三五三。

(56)『中日韓』三八五―一。

(57)『承政院日記』光緒七年二月十六日条。

(58)『中日韓』三八六。

(59) 拙稿「近代朝鮮の外交政策の一側面――「朝貢関係」と「条約関係」」(『朝鮮学報』一八四、二〇〇二年七月)。

You Zhikai of Qing and Korean Delegates
——Dispatch of delegates to the Qing dynasty——

CUI, Lanying

This paper focuses on the involvement of You Zhikai, a prefect of Yongping-fu, with delegates from Korea to the Qing Dynasty during the late 1870's to 1881.

You Zhikai was a local governor with extensive interaction with official interpreters, government ministers, and the king of Korea. Korea formed relationships with westernizing faction officials of Qing, such as Li Hongzhang through You Zhikai, and dispatched a group of "delegates to the Qing dynasty" in order to learn Qing's weapon manufacturing technology. This paper clarifies the existence of a bureaucratic relationship with Qing as a suzerain state, by verifying the human network between Korea and Qing, when the arrangement to dispatch "delegates to the Qing dynasty" was adopted. Analysis of the role of official interpreters, which has not been considered in previous studies, is another achievement of this paper.

You's literary poetry, "Zang yuan shi chao", published by Byun Wongyu, a former Korean official interpreter, is considered in this paper for the first time. The background of its publication and contents were analyzed, providing a glimpse of some of the specific ways officials and delegates interacted with each other. Literary works, including poems, were considered along with official records in order to explain negotiations between Korea and the Qing dynasty regarding the dispatch of delegates to the Qing dynasty from a different perspective.